

若手研究者海外派遣プログラム 派遣終了報告書

1 派遣者	
所属機関	国立民族学博物館
氏名	相島 葉月

2 派遣計画 概要	
派遣国	イギリス
派遣期間	平成 29 年 10 月 2 日 ～ 平成 29 年 12 月 29 日
派遣先機関名	マンチェスター大学社会科学学院
(英語)	School of Social Sciences, the University of Manchester
受入教員名	ルパート・コックス
(英語)	Rupert Cox
研究課題名	グローバル化する中東とイギリス人ムスリムの身体文化
(英語)	Globalisation of the Middle East and the Body Culture of Muslims in the UK

3 派遣による研究実績

(1) 調査研究実績 (研究計画に沿い、実施したことを記載してください。)

本研究課題の主たる目的は、ムスリム人口が集中するマンチェスター市内の空手教室において参与観察および聞き取り調査を行い、イギリスに暮らすアラブ諸国出身の空手家が、移民後に経験した身体観や美的感覚の変容を明らかにし、中東のグローバル化について考察することであった。

マンチェスターは産業革命で中心的な役割を果たし、世界中から移民労働者を受け入れて来た歴史的背景から、多文化、多宗教を自明とする社会として発展した。大マンチェスターでは150もの言語が話されているという。住宅街を歩いていると、スンナ派やシーア派のモスクだけでなく、ユダヤ教のシナゴグやヒンズー教の寺院も見かける。植民地統治の関係から、かつてイギリスのムスリムと言えば、インドやパキスタン出身者が大多数を占めていた。しかし、近年の中東地域における経済状況や政治情勢の悪化から、アラブ諸国やイランからの移民も増加の一途をたどっている。例えば、マンチェスター市中心部のムスリム居住地区は、南アジア系移民の商店が軒を連ねていたため「カーリーマイル (Curry Mile)」と呼ばれていたが、現在はアラビア語やペルシャ語の看板が目立ち、中東人街に変容しつつある。

マンチェスターの空手家コミュニティ(競技者、指導者、父兄)についての調査を実施するにあたり、ルパート・コックス准教授の助言のもと、マンチェスター大学付属図書館や動画ライブラリを利用してイギリスの東洋的な格闘技の歴史に関する資料を収集した。イギリスでは19世紀後半に柔術が紹介されて以来、「紳士のたしなみ」や婦人参政権運動家の「護身術」など様々な目的で人々が東洋的な格闘技に親しんできた。かのシャーロック・ホームズも英国式の柔術である「パーリツ」の愛好家であった。空手教室がイギリスで開かれるようになったのは1960年代だが、当初は「血気盛んな労働者階級の青年のスポーツ」というイメージが強かった。1980年代に空前のカラテ・ブームが訪れて以来、幅広い年齢層と社会階層のイギリス人が稽古に励んでいる。イギリスの空手普及に大いに貢献したエノエダ師範がスナック菓子「カンフイー」のテレビ広告に出演するほど、東洋的な格闘技としての空手の人気が高まっていた。

マンチェスター大学空手道部では同大学の学生だけでなく、大学外の社会人や子供も稽古に参加することができる。監督のギャリー・ハーフォード師範(8段)はイギリス代表として欧州大会で活躍したが、指導者に転じてからも優秀な空手家を輩出している。大学のある地域がムスリム居住区「カーリーマイル」から徒歩圏内にあるせいか、子供の生徒はアラブ人が特に多い。アラブ諸国出身の成人男性も数人いる。アラブ諸国において、空手道は子供のお稽古事として人気を博している。競技人口は4~12歳に集中していて、よほど優秀な選手でない限り、中学校に上がる頃には空手をやめてしまう。大人がスポーツをする習慣がないため、社会人になってから空手を始める者は皆無である。空手教室の参加者は、多様なアラブ諸国と社会階層の出身者であるものの、アラブ人ムスリムの連帯があることが挨拶の仕方や言葉かけの様子から伺えた。社会人がスポーツを続けるには強い決意が不可欠だ。家庭のある男性が空手を始め、息子と稽古に励むことによる苦労など、母国に残してきた家族や友達と共有するのは困難を伴う。マンチェスターの空手教室で形成されたアラブ人コミュニティは、移民を通じて新しい主体性を獲得した人々の連帯なのであろう。今後の調査で、イギリスで空手道を始めたきっかけや、続ける意義について明らかにしたい。

(2) 基幹研究プロジェクトにおいてこの派遣が果たした役割

国立民族学博物館現代中東地域研究拠点の中心テーマは「地球規模の変動下における中東の人間と文化」である。グローバル化する中東地域に生きる人々と世界とのつながりを、フィールドワークに基づく民族誌的データの分析を通じて再考することに主眼をおいている。本研究課題は、国境を越えた人と情報の移動をグローバル化の重要な指標ととらえ、イギリスで移民として暮らすアラブ系ムスリムの美的感覚と身体文化の解明を目指した。マンチェスターは多言語が飛び交う、とてもコスモポリタンなイギリス第二の大都市で、他の地域と比べてムスリム住民の割合が多いとされる。空手教室に通うアラブ系ムスリムへの聞き取り調査を実施することで、移民社会の多様性とグローバル化する中東を動的にとらえる手がかりを得ることができた。

(3) 所属機関における学術分野に貢献する事項

マンチェスター大学社会人類学科に客員研究員として所属しながら研究会に参加したり、教員と意見交換を行ったりすることで、イギリスにおける人類学的研究の動向についての理解を深めるとともに、所属機関である民博と派遣先との研究者ネットワークを構築することができた。今後、民博での国際ワークショップや、海外の学会での企画セッションを計画するにあたり、派遣中に形成した人脈や見地を活かすことが期待される。また海外の学術誌への投稿論文や著書を通じて成果公開を行う際にも、有益な人脈を開拓することができた。

(4) 研究成果（著書、論文及び報告書名・講演題目）

報告者は、これまで行ってきたエジプトの都市中流層の美的感覚と身体文化に関するフィールド調査の成果を民族誌としてまとめ、単著として出版する準備を進めている（仮題 *Karate as a Vehicle to Modernity: Aesthetics of Body and Power in Modern Egypt*）。本研究課題を通じて収集するイギリスで移民として暮らすアラブ系ムスリムの成果も一章として所収する予定である。

(5) 見込まれる研究成果（著書、論文及び報告書名・講演題目）

講演題目：Aishima, Hatsuki, “Orientalising the Orient: Searching for Karate’s Budo Roots in Contemporary Egypt”, *Workshop: French Orientalism and its Afterlives in Japan and the Middle East*, Paris: 9-10 February 2018.

研究報告：相島葉月、「不確かな現実と日常の間で—第 116 回アメリカ人類学会年次大会における中東・イスラーム人類学的研究の動向—」『民博通信』160 号、2018 年（入稿済み）。

論文：Aishima, Hatsuki, “Reflecting on the Anthropology and/or Ethnography of Islam”

（元マンチェスター大学で、現在はアバディーン大学教授の Tim Ingold による人類学と民族誌の違いに関する論考についての特集号のために準備中の論文）

(注意事項)

- ・本報告書は、帰国後 1 ヶ月以内に提出して下さい。
- ・この報告書を、本機構により刊行、Web 掲載、広報冊子等として公表することがあります。この場合、内容に影響しない範囲で修正を行うことがあります。